

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 10 日現在

機関番号：36301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13842

研究課題名(和文) 東南アジアにおける「ヒロシマ」の諸相 - グローバル化する記憶の社会学的研究

研究課題名(英文) Hiroshima in Southeast Asia: A Study on Globalization of Memory

研究代表者

根本 雅也 (Nemoto, Masaya)

松山大学・人文学部・准教授

研究者番号：00707383

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、暴力の記憶のグローバル化の可能性を検討するため、東南アジアにおける、広島・長崎への原子爆弾の投下を持つ意味の諸相を探った。特にシンガポールでの現地調査から浮かび上がったのは原爆の災禍が持つ意味の二面性であった。一方では、日本による占領や支配が負の記憶として大勢を占める中で、原爆の投下は日本の支配からの解放のシンボルとなっていた。他方で、少ないながらも、核兵器という暴力がもたらした苦しみに対するまなざしも垣間見られた。

また、日本国外で原爆展や証言活動など実施する日本の関係団体の調査からは、原爆の災禍に見出される意味が当該の団体の目的や相手の地域によって変わりうるということがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義の一つは、これまで顧みられることの少なかった東南アジアにおける原爆の表象を探ったことにある。東アジアと同様に、日本による占領・統治を経験した地域では、アメリカによる原爆の投下に肯定的な意味が付与されていた。他方で、核兵器という新しい兵器の登場やその破壊力は、肯定的な意味だけにはとどまらない意味を持つことを垣間見せていた。後者は原爆の災禍が世界的に共有されうる可能性を示すものであり、本研究の社会的意義といえよう。

研究成果の概要(英文)：This research project explored how the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki are represented in the Southeast Asian countries in order to consider the globalization of the memory of atrocity. A study on historical exhibitions and textbooks about the period of the Japanese occupation of Singapore from 1942 through 1945 shows there are ambivalent attitudes in Singapore toward the nuclear catastrophes. On the one hand, the atomic bombings of Japan mainly symbolize the end of Japanese occupation and the liberation of people in Singapore. On the other hand, in a few cases they imply the suffering of ordinary people due to the nuclear weapons. The project also examined how Japanese organizations try to educate people in the world about the suffering of Hiroshima and Nagasaki. It seems that their focuses and aims may vary depending on the organizations and their targets.

研究分野：社会学

キーワード：原爆 記憶 東南アジア 日本

1. 研究開始当初の背景

戦争や虐殺などの暴力の記憶は、歴史学や社会学において精力的に研究され、特に国家を中心のアクターとして、国家間の歴史認識の差異、記憶をめぐる国家と体験者のポリテクス、記憶とナショナリズムの関係等が検討されてきた。しかし、一方、ホロコーストや広島・長崎の原爆という暴力の経験は「人類の(負の)遺産」としても語られ、世界的に共有が試みられる稀有な事例でもある。原爆の記憶と日本のナショナリズムの関係が指摘される(Dower 1996; Yoneyama 1999)一方で、それが国を越えようとする普遍主義的な性格を持ち、世界的に広められている現象については十分に調査研究されてきたわけではない。

その中で、原子爆弾を製造し、実戦で使用したアメリカという国については、原爆投下やその災禍にまつわる記憶が一定程度議論されてきた。特に、1990年代前半に国立航空宇宙博物館において原爆を投下した爆撃機エノラ・ゲイと原爆展をめぐる論争が起きると、アメリカにおける原爆の記憶の問い直しが積極的に行われるようになった(Hogan ed. 1996; Lienthal and Engelhardt eds. 1996; Lifton and Mitchell 1995)。

他方、アメリカ以外の地域や国においては体系的に研究が行われてきたわけではない。東南アジアの国々はかつて日本の占領下にあった国も多い。数少ない先行研究によれば、日本の侵攻によって被害を受けた東南アジアの国々では原爆投下が自らの国の解放につながったとして肯定的に捉えられている(林 1989)。第二次世界大戦から年月を経た今日において、東南アジアで広島と長崎の原爆の災禍がどのように伝えられているのかを探り、その背景にある論理と力学を検討することは重要な課題の一つであるように思われた。

東南アジアにおける原爆の災禍の表象を調査研究することは、単に同地域における歴史認識や原爆観について検討するにとどまらない。その根底には、ホロコーストとともに、「人類の(負の)遺産」としてしばしば位置づけられる核兵器の災禍がどのような論理や力学によって国境を越えるのかという問いがある。つまり、本研究は、暴力の記憶のグローバル化の可能性と境界を検討するための事例として東南アジアを取り上げるという性格を有している。

2. 研究の目的

本研究は、暴力の記憶のグローバル化の可能性と境界について探ることを大きな目的として、東南アジア諸国における、広島・長崎への原子爆弾の投下及びその惨禍に対する意味の諸相を明らかにすることを目的とした。

具体的に調査研究を進めるために、本研究は、日本による占領統治を経験したシンガポールとフィリピン、第二次大戦後にジェノサイドを経験したカンボジアを対象とし、それらの地域において広島と長崎の原爆の災禍がどのように位置づけられるのかを検討する。また、同時に、海外で原爆展や証言活動など実施した経験を持つ日本の関係団体に着目し、その活動の内容や背景について検討する。こうした作業を通じて、本研究は原爆の記憶が国を越えて広がる状況と、その背後にある論理と力学をとらえることを試みる。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究は大きく次のような調査を実施した。

(1)シンガポールにおける調査

シンガポールでは平成30年度、平成31(令和元)年度に現地調査を実施した。日本によるシンガポール占領やその記憶に関する研究に加えて、博物館等における歴史展示の観察や市内に散在するメモリアルの見学、関連するガイド・ツアーへの参加、学校における社会・歴史の教科書の収集などを行なった。教科書の一部については先行研究(Saito et al. 2014)も存在する。

(2)フィリピンにおける調査

フィリピンにおける調査は平成30年度に実施した。大規模な市街戦を経験したマニラ、「死の行進」で知られるパターンなどでメモリアルや関連する展示などを観察するとともに、資料の収集を行なった。また、パターンには建設されたものの稼働していない原子力発電所があり、同所の見学を行い、原爆の災禍への言及が見られるのかどうかを探った。

(3)日本における関係団体の調査

原爆の災禍は日本から国外に伝えられてきた。本研究では、こうした活動に取り組む経験を持つ団体について、文献資料の収集などを通じて検討した。主に取り上げたのは、海外での原爆展

や被爆証言者の派遣を行ってきた広島市及び広島平和文化センター、海外青年協力隊などのボランティアの派遣しつつ、彼/彼女らを通じて原爆展を実施している国際協力機構（JICA）、そして原爆被害者の団体である日本原水爆被害者団体協議会などである。

なお、上記に加えて、もともとはカンボジアにおいて調査を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大もあって、結果的に実施することができなかった。同地での調査は今後の課題としたい。

4. 研究成果

以下がこれまでの調査を通じて得た主な成果である。

(1) シンガポールにおける日本占領の記憶

イギリスの植民地であったシンガポールは、1942年2月から1945年8月までの3年半にわたって、日本軍によって統治下に置かれ、都市は「昭南」と改称されていた。日本軍による支配は、物資の供給を不安定にさせるなど生活に影響を及ぼし、またその暴力によって多くの犠牲も生んだ。そのため、日本による占領の時代は、シンガポールの苦難の歴史として記憶されている。

シンガポールにおける戦争の記憶に関する先行研究によれば、日本の占領・支配という負の記憶は、シンガポール独立後のナショナル・アイデンティティを構築する手段でもあった（Blackburn and Hack 2012; Muzaini and Yeoh 2016）。1965年にマレーシア連邦から分離独立して以降、マジョリティは中華系であっても、マレー系やインド系など、複数のエスニック集団によって構成される国民を「シンガポール人」としてまとめる必要があったからである。

日本による占領統治が負の記憶として描かれていることは、市内にある様々な展示や記念碑、教科書などからも理解できる。たとえば、シンガポール国立博物館（National Museum of Singapore）は、シンガポールの歴史を四つの時代に区分している。第一は植民地期前の「シンガプーラ（Singapura 1299 - 1818）」であり、第二はイギリスの植民地期（Crown Colony 1819 - 1941）となる。第三の時期が「昭南島（Syonan-To 1942-1945）」となっており、その後が「シンガポール（Singapore 1945-現在）」となる。日本の占領は他の時代区分の期間と比べて圧倒的に短いにもかかわらず、四つの時代区分の一つを占めていることになる。

(2) シンガポールにおける原爆の二つの表象

シンガポールにおいて、日本の支配が負の記憶として存在し、そのように描かれる中で、アジア太平洋戦争末期に起きたアメリカによる原爆投下は、日本の支配の終わりを告げるシンボリックな出来事として表象される傾向にある。たとえば、セントーサ島にあるシロソ砦（Fort Siloso）における展示はその一例であろう。イギリスの植民地時代における防衛の要所であったシロソ砦は、現在、砲台などとともに軍事遺構として残され、一般の人々に開かれている。そこにある「降伏の部屋（Surrender Chambers）」は、日本軍のシンガポール占領から第二次世界大戦の終結までを展示している。展示の一角には、廃墟となった広島の街、原爆ドームの前に1人の男性が立っている写真がある。ナレーションにより、ヨーロッパでの戦争が終わり、日本との戦争に連合軍の力が注がれるようになったこと、日本が占領している島々を連合軍が一つずつ落としていったことなどが述べられ、照明が暗転する。そこに米軍の爆撃機 B29 の機体を模した光が映し出され、爆弾の投下音に続いて爆発音が流される。ニュース音声の流れ、原子爆弾が使用されたこと、日本が降伏したことが告げられる。このように、原子爆弾の投下は、日本支配からの解放のみをシンボライズする出来事として用いられる。

他方、シンガポールでは、原子爆弾の投下は日本の人びとが被った苦しみとして描かれることもある。数少ない事例の一つは、上記のシロソ砦の別の展示室に見られる。ここでは、抗日運動とともに、原子爆弾の投下についての展示がある。原子爆弾については投下の歴史的経緯が簡単に解説される。同じ展示室に、日本の学校から送られた千羽鶴が飾られており、その脇には2歳で被爆し1955年に亡くなった佐々木禎子について写真と簡単な説明がある。原爆による被害についての展示は分量としてはわずかなものである一方で、核兵器の災禍が単に日本占領からの解放を指し示すのではないことを示唆していると考えられる。

(3) フィリピンにおける日本の支配と原爆の表象

フィリピンにおいても、シンガポールと同様に日本による占領と暴力的支配の歴史があり、その苦難は各地の記念碑や展示などからも見てとることができる。本研究の調査の中で訪れたバターン州のある小学校には、第二次世界大戦博物館（Bataan World War II Museum）があるほか、日本軍の統治下に関連する遺物が残されている。そうした遺物は、日本軍による現地の人々に対する暴力的行為を伝えている。

フィリピンにおける調査において、原爆の表象についてはそれほど情報を得られたわけではない。このことは、レイテ島の戦い、マニラ市街戦など、日本軍との大規模な戦闘の多くは原爆が投下される以前に終わっていたことと関係あるように思われる。

だが、原爆の投下という出来事そのものは、フィリピンにおいても知られているように思われ

る。たとえば、フィリピン南西部にあるパラワン島の都市プエルトプリンセサにある私設の第二次世界大戦博物館 (Palawan Special Battalion WW-II Memorial Museum) では、小規模な展示の一角に原爆についての写真やパネル展示がなされていた。

なお、フィリピンでの調査は平成 30 年度に一回実施するにとどまったことから、今後より詳細な調査が必要であることを付記しておく。

(4) 日本から世界への訴え 原爆の災禍と第二次世界大戦の関わりを中心に

本研究では、東南アジアにおける調査を通じて同地でどのように原爆の災禍が表象されるのかを探る一方で、日本において、原爆の災禍にどのような意味が見出され、世界に対してどのような訴えをしているのかについて探った。シンガポールの事例のように、東南アジアにおいては原爆の投下と日本による戦争・占領という歴史的な文脈が密接に関係付けられる傾向にあることから、以下ではその点に関連して記すことにしたい。

広島市は原爆の災禍に対して人類や世界にとっての意味を見出し、その被害の経験をもとに核兵器の禁止を世界に訴えてきた。こうした訴えは、1980 年代以降に各国の都市との連帯を通じた具体的な働きかけとして展開されるようになった。他方で、核兵器の災禍と日本の戦争の関わり (特にアジア) については、時代により変化しつつも、それほど積極的に言及してきたわけではなかったようにみえる。

独立行政法人として発展途上国に海外協力隊員を派遣している国際協力機構 (JICA) は、2004 年以降、隊員たちが派遣先の地で原爆展を行うことを支援してきた。資料によると、特に内戦などの暴力を経験した国々において実施され、平和などとともに、復興が強調されている。このことは、原爆の災禍の意味が、それが起きた歴史的な文脈よりも、開発・復興という文脈の中で捉え直されていることを示唆している。

以上を踏まえると、原爆の災禍は世界へと伝えられる過程で、ときにそれが起きた第二次世界大戦という歴史的な文脈から切り離されたり、あるいはそこへの言及が回避されたりする。逆に、そうすることで原爆の災禍を指す「ヒロシマ・ナガサキ」は世界に流通しうるシンボルとして形づくられているのかもしれない。

他方、日本において、戦争と原爆の災禍を結びつける動きの一つに原爆被害者の運動があった。日本の各地の被爆者団体をつなぐ日本原水爆被害者団体協議会 (日本被団協) は、自分たちの被害の経験をもとに核兵器の禁止を世界に訴えてきた一方、日本政府に対して国家補償の要求も行ってきた。これは原爆の被害が起きたことなどの責任を政府に求めるものであり、その制度の確立によって将来の核戦争を防ぐ意図もあった。この点では、原爆被害者たちの運動は戦争と核兵器の結びつきを強調しながら、世界への訴えを行ってきたともいえるように思われる。

「日本から世界への訴え」については検討すべき団体や活動が多く存在する。また上述の団体についてもより深く調べ、整理が必要であろう。こうした作業は今後の課題としたい。

[参考文献]

- Blackburn, Kevin and Karl Hack, 2012, *War Memory and the Making of Modern Malaysia and Singapore*, Singapore: NUS Press.
- Dower, John W., 1996, "The Bombed: Hiroshimas and Nagasakis in Japanese Memory," v Michael Hogan ed., *Hiroshima in Memory and History*, New York: Cambridge University Press, 116-42.
- 林博史, 1989, 「8・15 はアジアの人々にとっていかなる日か」歴史教育者協議会編『日本歴史と天皇』大月書店.
- Hogan, Michael J. ed., 1996, *Hiroshima in Memory and History*, New York: Cambridge University Press.
- Lifton, Robert J. and Greg Mitchell, 1995, *Hiroshima in America: Fifty Years of Denial*, New York: Grosset & Patnum.
- Linenthal, Edward T. and Tom Engelhardt eds., 1996, *History Wars: The Enola Gay and Other Battles for the American Past*, New York: Holt Paperbacks.
- Muzaini, Hamzah and Brenda Yeoh S.A., 2016, *Contested Memoryscapes: The Politics of Second World War Commemoration in Singapore*, New York: Routledge.
- Saito, Eisuke, Teresa Alviar-Martin and Khon Thi Diem Hang, 2014, "How can we teach the old foe's wounds: analysis of descriptions of the Japanese occupation and the atomic bombs in Vietnamese and Singaporean textbooks," Mark Baildon, Loh Kah Seng, Ivy Maria Lim, Gui Inanc and Junaidah Jaffer eds., *Controversial History Education in Asian Contexts*, New York: Routledge.
- Yoneyama, Lisa, 1999, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Berkeley: University of California Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nemoto Masaya	4. 巻 2
2. 論文標題 Remaking Hiroshima and Nagasaki: Local Commemorations of Atomic Bombings in the United States	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal for Peace and Nuclear Disarmament	6. 最初と最後の頁 34～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/25751654.2019.1638338	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 根本雅也	4. 巻 21
2. 論文標題 在米原爆被爆者とその周辺	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館大学国際平和ミュージアム紀要	6. 最初と最後の頁 23-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本雅也	4. 巻 16
2. 論文標題 幻覚の口述史 ある原爆被爆者の憎しみとゆるしの物語り	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本雅也	4. 巻 16
2. 論文標題 特集にあたって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本雅也	4. 巻 16
2. 論文標題 日本とアメリカのはざまで 在米原爆被爆者の運動史の解明に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島平和記念資料館資料調査委員会 研究報告	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計9件(うち招待講演 3件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 根本雅也
2. 発表標題 幻覚(vision)の口述史 ある被爆者の憎しみと赦しの物語り
3. 学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会第17回大会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nemoto Masaya
2. 発表標題 Uncertainty of Victims, Victims of Uncertainty: Qualitative Study on Radiation Effects in Atomic Bomb Survivors
3. 学会等名 IUAES 2019 Inter-Congress(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根本雅也
2. 発表標題 ヒバクシャになれなかった被爆者 アメリカに住む原爆被爆者たちの運動史
3. 学会等名 日本国際文化学会第18回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根本雅也
2. 発表標題 継承されていないものは何か 原爆被害者調査を中心として
3. 学会等名 RECNA長崎被爆・戦後史研究会 公開・総括シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masaya Nemoto and Yoshihiro Yagi
2. 発表標題 Outrage for Peace: Questionnaire Study on Hibakusha's Thoughts and Experiences
3. 学会等名 World Social Science Forum 2018(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 根本雅也
2. 発表標題 継承の力学 広島における『被爆体験』の遺産化とその影響
3. 学会等名 長崎被爆・戦後史研究会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaya Nemoto
2. 発表標題 Living with uncertainty, struggling with possibility: A study on radiation effects from the perspective of Atomic Bomb survivors
3. 学会等名 UGAT 40th Annual Conference(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaya Nemoto
2. 発表標題 Globalization and Localization of War Memory: Representing Hiroshima and Nagasaki outside Japan
3. 学会等名 The 6th JSA ASEAN Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaya Nemoto
2. 発表標題 The Effect of Construction of Aggressors and Victims: Storytelling Activities of Atomic Bomb Survivors in Hiroshima
3. 学会等名 The 2018 AAS conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 根本雅也 (編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 根本雅也	5. 総ページ数 109
3. 書名 彼らはなにを訴えるのか 被爆50年原爆被害者調査自由回答報告書	

1. 著者名 根本雅也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 ヒロシマ・パラドクス	

1. 著者名 松尾 浩一郎、根本 雅也、小倉 康嗣	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 304
3. 書名 原爆をまなざす人びと	

1. 著者名 石田淳、佐藤史郎、下谷知奈緒、上野智也、小松寛、清水奈名子、根本雅也ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 204
3. 書名 戦争と平和を考えるNHKドキュメンタリー	

1. 著者名 蘭信三、小倉康嗣、今野日出晴、根本雅也ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 503
3. 書名 なぜ戦争体験を継承するのか ポスト体験時代の歴史実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------